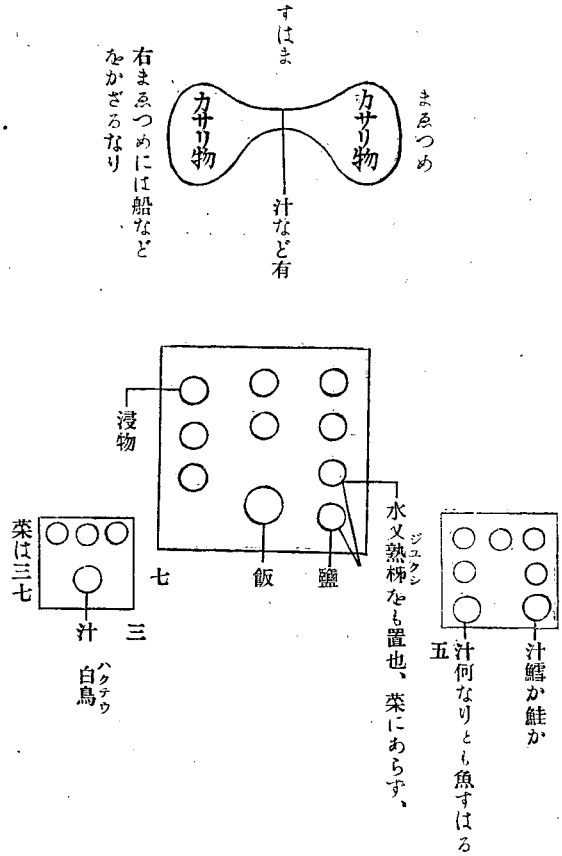
大草流也、流によりて替るべし、五。五。三。と云は七五三を略して、めしにても湯づけにても、五の膳まで出すなり、

〔四季草六秋草下〕七五三　七五三の膳と云を、今世しらぬ人は、本膳にさい七ッ、二の膳に菜五ッ、三の膳に菜三ッ、くみ付る事とおもへり、それは七本立、五本立、三本立とて、菜の數の事なり、七五三の膳部にはあらず、七五三といふは、先ヅ三とは式三獻なり、膳三ッあり、引わたし、うちみ、五とは五獻出すを云、其五獻は、初獻烹雜ざうにのこと、なり添肴あり、二獻まんぢう添肴あり、三獻あつ物、吸物の事なり四獻むし麥ひやむぎ、ぬるむぎ、時節によるべし、添肴あり、五獻やうかん又水仙かんの類添肴あり、右の膳何れも組付け物あり、七とは、飯湯づけても同じに七の膳まで出すを云ふなり、是等の食物の調樣は、庖丁の家々に傳へて故實ある事なり、武家の知る事にあらず、庖丁家に尋ねゑるべし、

〔甲陽軍鑑十六品第四十四〕湯浸ゆづけ之事　菜數七五三也